

八重山語小浜方言の 中舌母音の摩擦音化について

クリストファー・デイビス

琉球大学

第一回「危機言語の保存と日流諸語のプロソディー」

合同研究発表会

書き起こしをしてみてください：



意味を知った上での分析は？

研究者：「紙」は何と言いますか？

協力者：



他の地域の言い方を知った上での分析は？

石垣方言では、「紙」は [kab^zi] となっています。



(私に) 考えられる分析

- [kəpʊs̺i] /kəpʊs̺i/ CVCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り
- [kəps̺i] /kəps̺i/ CCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り
- [kəps̺] /kəps̺/ CC 論 : /s/ 有り
/i/ 無し
- [kəp̺s̺i] /kəp̺i/ CV 論 : /s/ 無し
/i/ 有り

(私に) 考えられる分析

- [kəpʊs̺i] /kəpʊsi/ CVCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り
- [kəps̺i] /kəpsi/ CCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り
- [kəps] /kəps/ CC 論 : /s/ 有り
/i/ 無し
- [kəp^{s̺}i] /kəpi/ CV 論 : /s/ 無し
/i/ 有り

仲原 穰 (2004) 論
「八重山小浜方言の音韻」

(私に) 考えられる分析

• [kəpʊs̺i] /kəpʊsi/ CVCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り

• [kəps̺i] /kəpsi/ CCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り

Chris Davis (今日) 論

• [kəps] /kəps/ CC 論 : /s/ 有り
/i/ 無し

• [kəps̺i] /kəpi/ CV 論 : /s/ 無し
/i/ 有り

仲原 穰 (2004) 論
「八重山小浜方言の音韻」

トピック形

- 八重山語の名詞が単母音で終わる場合、その母音の長母音化と半狭母音化による「トピック形」がある（琉球諸語で広く観察されるパターンと同じ）

- $i \rightarrow e:$ 小浜方言の例： $gufi$ (酒) \rightarrow $gufe:$ (酒は)
- $u \rightarrow o:$ 小浜方言の例： $saru$ (えび) \rightarrow $saro:$ (えびは)

- 中舌母音はどうなるのか？

- 石垣方言（伝統的） ： $i \rightarrow \ddot{e}:$ 例： $tur\ddot{i}$ \rightarrow $tur\ddot{e}:$
- 宮良方言 ： $i \rightarrow a:$ 例： $tur\ddot{i}$ \rightarrow $tura:$

[u] と [i] は音声的には区別しにくい

「えび」と「鳥」の発音の比較：

• えび saru



• 鳥 turu ??
 turi ??



でもそのトピック形で区別ができる

「えびは」と「鳥は」の発音の比較：

• えびは sarou:



→ 鳥は /turu/ だったら、トピック形が [turo:] となるはず

• 鳥 tura:



→ トピック形が [tura:] となっているのは、/turi/ である証拠

例文：

saro: uranu
えびは いない



tura: tipi uranu
鳥は 飛んで いない



「紙」のトピック形

kapsa: neenu
紙は ない



- /kapi/ 論では、音素 /s/ がなくて、/pi/ が音声的に [p^si] となっているだけである。
- そうすると、i → a: のトピック形が /kapa:/ となり、中舌母音がないので、音声的に [kapa:] となるはずである。
- トピック形にも [s] があることが「/s/有り論」の証拠となる。

(私に) 考えられる分析

• [kəpʊs̩i] /kəpʊs̩i/

CVCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り

• [kəps̩i] /kəps̩i/

CCV 論 : /s/ 有り
/i/ 有り

Chris Davis (今日) 論

• [kəps] /kəps/

CC 論 : /s/ 有り
/i/ 無し

• [kəps̩i] /kəps̩i/

CV 論 : /s/ 無し
/i/ 有り

仲原 穰 (2004) 論
「八重山小浜方言の音韻」

/s/ 有り論
トピック形にも s が現れるはず
[kəpʊsa:]
[kəpsa:]

/s/ で終わっているため、
予測されるトピック形は不明

/s/ 無し論
トピック形に s が現れないはず
[kəpa:]

他の/psi/で終わる名詞とそのトピック形

• /tupsi/ (砥石)



/tupsa:/ (砥石は) ※[tupssa:] では？



• /upsi/ (帯)



/upsa:/ (帯は)



• /akupsi/ (あくび)

/akupsa:/ (あくびは)

/ksi/ で終わる名詞とそのトピック形

• /ma:ksi/ (ひんぷん)



/ma:kʰsa:/ (ひんぷんは)



• /ga:ksi/ (鎌)



/ga:kʰsa:/ (鎌は)



• /dʒo:nksi/ (定規)



/dʒo:nkʰsa:/ (定規は)



/pusi/ と /psi/ の対立

- 「紙」の音素を/kapsi:/と設定しているが、/kapusi:/ [kəpʊsi] として考えてもいいんじゃない、という考えはどうか。
- 音声的に無声母音なのか、無母音なのかは、判断しにくい。
- そこで、ミニマルペアが救い者:

/kapsi/ (紙)

対

/kapusi/ (頭にものを載せるために使う道具)

/kapsi/

/kapsi/ は、/u/ が無声化したりしなかったりします：

[k̠ap̠us̠i̠] ← 全ての母音が無声化している



[k̠ap̠usi̠] ← /u/ が無声化していない



[k̠ap̠usi] ← /u/ も /i/ も無声化していない



例文で確かめる /kapusi/ の発音

kapusi

カプスイ

mutsi

持って

ku na:

来い



/kapsi/

- /kapusi/ の /u/ は無声化もするが、有声母音として発音されることもある。
- これに対して、/kapsi/ ではこれまでそういう発音は一回も観察したことがない。
- /kapsi/ にはそもそも /u/ が存在しないなら、これが当然なことである。
- 他の /psi/ や /ksi/ と設定している単語も同じである。

/kapusi/ のトピック形

- これまで観察した例と理屈から、/kapusi/ のトピック形を推測したらどうなるだろうか。
- $i \rightarrow aa$ の法則から推測したら、/kapusa:/ となるはず。
- 発音的には、[kəpɯsa:] または [kəpusa:] となるはず。
- 実際にそのトピック形が出た例文を観察すると：



/kapusi/ のトピック形

[kəpʉs(s)a:] / [kəpʉs(s)a:]

カプスイは

zima=nga=tu

どこに

aru=ka:

あるか



bikindumma:

男は

[kəpʉssa:]

カプスイは

tsika:nu

使わない



/si/ で終わる名詞のトピック形

• /o:musi/ (むしろ) → [o:mussa:]



• /usi/ (臼) → [ussa:]



• /garasi/ (カラス) → [garassa:]



/n/ で終わる名詞のトピック形

bikindum**ma**:

男は

kapussa:

カプスイは

tsika:nu

使わない



bikindun (男) → bikindum**ma**: (男は)

minama:

今は

num**ma**:

ノミは

uranu

いない



nun (ノミ) → num**ma**: (ノミは)

/C/ で終わる名詞のトピック形が /CCa:/ ?

- /n/ → /mma:/ (なぜ両唇摩擦音になるかを置いといて)
- ならば、
/s/ → /ssa:/ も考えられるのでは。
- /si/ ではなく、/s/ で終わっていると再分析し、上の法則で考えると：

/us/ (臼)	→ /ussa:/ (臼は)
/garas/ (カラス)	→ /garassa:/ (カラスは)


※ /i/ が無声化・脱落しない /oomusi/ はこんな再分析が不可能

/si/ の最後の /i/ が摩擦音かして、/ss/ となっているのでは？

- /usi/ (臼) だと設定しているが、音声的に [us̺i] となるはず。
- [us̺i] と [uss] が果たしてどれぐらい区別されるだろうか。
- [uss] として再分析される可能性も？そうすると：

/u ss /	(臼)	→ /u ssa :/	(臼は)
/gar ass /	(カラス)	→ /gar assa :/	(カラスは)

/si/ で終わる名詞の次に /s/ が来る場合

/usi/ (牛) 

[ta:=tu us(i) s̩inas̩itaru=kaja:] 

誰が 牛を 死なせたかな

中舌母音から摩擦子音へ

通時的な観点から考えると、次のような変化が考えられる：

① /Ci/ [C ^s i]	→	② /Cs ⁱ /	→	③ /Cs/
中舌母音が、音声的に音素として設定されない摩擦音（のような音）を伴って発音される。		その摩擦音（のような音）が、摩擦子音の音素として再分析される。		元の中舌母音がなくなる。

- 小浜方言が、ちょうど②と③の間の段階にあるのではないか。
- つまり、摩擦音が音素として完全に再分析され、中舌母音事態の存在が揺れているところにあるのではないか。
- そうすると、音素設定がバリエーションの存在する /Cs(i)/ となる。

中舌母音から摩擦子音へ

• [kəp^si̯]

/kəp^{i̯}/

CV 論 : /s/ 無し

/i̯/ 有り

①

仲原 穰 (2004) 論
「八重山小浜方言の音韻」

• [kəp^si̯]

/kəp^si̯/

CCV 論 : /s/ 有り

/i̯/ 有り

②

Chris Davis (今日) 論

• [kəp^s]

/kəp^s/

CC 論 : /s/ 有り

/i̯/ 無し

③

補足 1-1 : /ci/ で終わる名詞

注 : c = 音声記号の ts

• /mic*ī*/ (道)



→ micca: (道は)



• /φuc*ī*/ (口) [φuc̥*ī*] または [φuc̥*ī*]



→ φucca: (口は)



補足 1 - 2 : /nci/ で終わる名詞

• /minci/ (水)



→ mincca: (水は)



• /te:nci/ (島いちご)




→ te:nc(c)a: (島いちごは)




補足 1 - 3 : /ci/だけからなる単語

• /ci/ (血) (単独で発音している例がない)

• ci=ndu ndiru
血が 出ている 

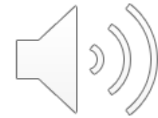
• /csa:/ (血は) ※/csa:/ の発音は、[tssa:] になっている

• [tssa:] ndi uranu
血は 出て いない 

→ /cca:/ より /csa:/ として考えた方がいいのは、長く発音されているのが[ts]の[s]の部分であるため。理論的にはどう考えるべきだろうか。

補足 2 : /psi(:)/だけからなる単語

- /psi/ (火) 無声 : [ps(s)] 有声 : [psi(:)]



- /pssa:/ (火は)

